

まる。どのような大義名分によって抑えられていようと、苦しい現状を打破する希望をもちつづける術をもつ一数々の場面で、私は人

間として当然で大切なことを改めて実感したのであった。

ジュガード・ソリューション

—場当たりのような、ひとつの知恵のような、思い込みを取っ払う言葉—

川 中 薫*

2009 年からデリーのアパレル生産企業を中心に、アパレルやテキスタイル関連の生産現場を訪れる機会をえている。おもに北インドの地域で、見に来てもいいよといってもらえるたびに、ほいほいと出かけていく私である。

8 月、毎年のように訪れてお馴染みになっている企業に、半年ぶりに顔を出した。本生産がはじまる冬にむけて、サンプル生産をしているところである。

「こんにちは、元気だった？」といって顔を出すと、「おお、よく来た。まあまあ、座れ、座れ。どうだった、元気だったか、家族は元気か。チャイを飲むか」と、どのフロアでもまずはマネジャーやマスターが、そして馴染みのメンバーが次々に話しかけてくる。ここは小規模の会社で、たいていの情報はすぐに誰かが伝達して、次の場所では話が早い。私のヒンディー語もすこしは上達したのかなと幸せな錯覚を覚える初日である。

各フロアをひととおりまわって 2、3 日もすれば、すっかりお客さんではない私には、11 時から 15 分間と 16 時から 15 分間のチャイ休憩時に、マネジャーやマスター用の余りがあれば飲むかと聞いてくれる。このお茶休憩と 13 時から 30 分間の昼休憩を合わせた 1 時間、フロアの電気と動力を消すので、普段鳴り響いているミシンの音も静まり、布地をバタバタして巻き上がる埃に悩まされることもない。ごろんと屋上や部屋の隅で横になったり、ひとり黙々とお祈りを捧げる人がいるかと思えば、ベルの音と同時に階段をかけ降りて外に行き、タバコを吸いながら話をしたり、お茶を飲んだりする人もいる。このときは、隣近所の工場やオフィスも休憩時間で、急に道端に人が増え、通り沿いの小さな露店がにぎわう。

隣の建物の地下にある企業と 2 軒隣の工場は同じようなアパレル会社で、向かいは布地の工場、裏の建物はアパレル輸出促進関連

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

の事務所、同じブロック内には染色工場、刺繍企業がいくつかある。休憩のとき外に出ると、このあたりで働く人たちが取引先以外の他の企業のこともよく知っているのかわかるような気がする。時間も限られているから、遠くや違う通りへは行かないが、テーラーはテーラー同士、現場のマスターはそれぞれ同じ仕事をしている者同士なんとなく集まって、話をしたまま仕事に戻って行くのである。

このようなカジュアルな情報交換の場や、以前働いた場所での関係から新たな仕事につながることもよくあり、私もそこに混じって、いろいろな人がもつノウハウや知り合いを紹介してもらいながら染色や刺繍の産地に出かけている。

こうしてものを作る現場でフィールドワークをしている最中によく思い浮かぶ言葉がある。ヒンディー語でカジュアルに、そして、たいていおもしろおかしく、よい意味でつかう *jugaad* という言葉である。 *Jugaad solution* などと組み合わせると、フットワークの軽い、ローコストでテンポラリーな解決法や創意工夫を形容する。デリーで知り合いを紹介してもらったときにも、都市部をはなれて村でもものを作る現場にいるときにも、事前に計画したとは思えない仕事のすすめかたを目にするたびに、この特徴的な言葉を思い出すのである。

1月、北西部に位置するラージャスターン州ジャイプール市から車で1時間ほどの距離にあるプリント生産集積地を訪れた。サンガネール村は、昔から木製のハンド・ブロッ

クを使ったプリントで有名で(写真1)、そのほかに鉄製枠に多様な模様を入れたスクリーン生地を使って行なうプリント(写真2)もみられる場所である。なるほど、一画すべてがプリント工場で、普通の住宅の2階部分に5メートルほどの作業台を2つおいているところから、約25メートルの作業台を5列備えた工場まである。さらには、2人1組になって行なうハンド・スクリーンプリントを、古い枠はそのまま利用して、色を伸ばし乾燥するところにだけ動力を備え付けた半自動プリント機械をおく工場もある。昔ながらの方法も使いながら、出来るところから次々と何かを付け足して生産がなされている一帯は、ビレッジと聞いて、日本からきた素人学生が勝手に思い描いていた、ラージャスターン州の荒涼とした、広い地平線のなかにある村とはちがうものだった。幹線道路が近いこともあって、できた製品は軽トラックやバイク、ラクダ、牛、馬の荷車に載ってジャ



写真1 ハンド・ブロックプリントの様子



写真2 ハンド・スクリーンプリントの様子

イプール市内まで運ばれ、さらには大型トラックなどですぐにデリーや他の都市へ運送されるのである。

初めてデリーの工業地域を訪れたとき、え、こんなところで作っているのかと思ったものなのだが、今回も、え、こんなところから布がプリントされて来ているのかと驚くばかりである。前者の「こんな」は、都会とは思えなかったという意味で、後者の「こんな」は、驚くほど都市に近いものだったという意味である。今では、さまざまな場所でアパレル生産をみて、こちらの人のビジネスのすすめ方、交渉の様子やテンションも理解してきて、前者の工場が輸出製品を作る十分な場所であるとわかるが、当初は、継ぎ足しながら造ったのではないかというほど、ややこしい建物の造りや、あまりにもいろいろな従業員の服装、自分をみる人々の目、機械の音や繊維の埃、同じヒンディー語と全く思えない聞き取れない言葉、小さくて目立たない看板、照明の度合い、つくっているもののバラエティーなどさまざまな要素が一緒になって押し寄せ、日本から持ち込んだ自分のイメー

ジとは程遠いなかで、「こんな」ところで作っているのかと驚いたのである。今回は、すこしはデリーで修行を積んだ身であるし、村落部は都市とかなり違うと思っていたのだが、思った以上にデリー市内での生産現場とラージャスターンの村での生産現場での仕事のすすめ方が似ていて、やはり新鮮な驚きがあった。

この驚きは、私が固定化された地域のイメージをもっていたためでもあるだろうが、単にそれだけではない。どの場所も、政策の変化の下、工業団地が近隣に出現したりしなかったり、人々の行き来、ものの運搬、情報の伝播などさまざまな要素が組み合わさって、変化しながら存在している。そしてその変化が、どうやら私が考えている(た)よりも、はるかに *jugaad* (テンポラリー) なのである。それは、村落部でのスクリーンプリントの例でいえば、今ある古い枠を利用してまずは動力を補う試みであるし、都市部のアパレル企業が、手持ちの情報網をたどって染色を専門に行なう村に仕事をだし、その後デリーで少しアレンジを加える試みであるかもしれない。また、都市でも村でも運送に何でもトラックを使うのではなく、場所によって異なる道路状況やコストを考え昼間は動物の力をかりて近くの間所まで運んでおき、その後乗り物を組み合わせたりすることでもあるかもしれない。

それは、一方では長期的視点に欠けた場当たりのなものだと映るかもしれない。しかしながら、とにかく今ある手持ちの情報や人やものからやってみるといふ、目に見えないし

説明しがたい意識や考えは、デリーにいても ともに、私の思い込みを取っ払ってくれるの
都市部からはなれても、いつも新鮮な驚きと である。